

## オープンダイアログを「知の形式」として ——ベイトソンの系譜から——

野村直樹\*

「オープンダイアログの祖先はベイトソンとパフチンである」

カリ・ヴァルタネン

ニュートン（1563-1642）はガリレオ（1642-1727）が亡くなった年に生まれた。そのガリレオとニュートンが生きた時代を合せると17世紀の全体が覆われる。それ以降が近代科学の快進撃の時代である。現在私たちは科学的なものと非科学的なものとの、いとも簡単に区別する。迷信やオカルト的なものは、もてはやされたとしても、科学的とはみなされない。政治判断も、経営判断も、医療判断も、占星術や易をもとにはしない、少なくとも表向きは。

ところが、ルネサンス期またはヨーロッパで錬金術が盛んだった頃は、そうとは言えなかった。ものと心は区別しにくかった。主体（観る者）と客体（観られる者）をはっきり区別しにくかった。区別ができなかったわけではない——区別しない方がよかったのだ。そして、エリアーデ M (Eliade, 1949) が言ったように、人々は円環的時間の中に生きていた。月日は巡って元に戻る。しかし、人は生まれ、成長し、老いる。これは、直線的ではないか、われわれの時計時間のように？ もちろん、人生が直線的に見えなかったわけではない——それだけとして見ない方がよかったのだ。

近代科学は、テクノロジーが哲学になった思想体系のことである。新しい技術を手中に収めることが目標となり、それが生き残りの鍵を握る。匠の技、工芸、民芸、秘伝などは、一種テクノロジーであり大変貴重なものだが、それが近代科学にならない理由は、「その人」の関与が求められる点にある。どんなアートでも、人と技術は切り離せない——造形が作者と一体であり、ものと作者の心が区別できない。区別しない方がよいのだ。

しかし、近代科学の誕生にはこの区分けが欠かせない。作る人と作られる物が一体であったら大量生産、科学知識は望めない。主体と客体の分離、観る者と観られる者との分離、そして、心と身体との分離。この二元的な区分けに決定的な役を果たしたのが、ルネ・デカルト（1596-1650）である。デカルトも17世紀の前半を生きたが、彼の功績は物理学、数学を超える。確かにデカルトは幾何学をものごとが正しいかどうかの判断基準に据え、数こそが頼りになる基準と考えた。複雑な幾何学問題も細分化すると、分解され、補助線を使い単純に証明の連鎖が可能になる。複雑そうに見える問題もそうして解かれる。世界はこうして知れると考えたのがデカルトである。

デカルトの『方法叙説』（1637）は、一人称で書かれた感動的な書物である。寒いドイツの冬、ひとり炉部屋で思索をかさねて、「我思う、ゆえに我あり」という哲学の第一原理を言い当てた彼は、天にも昇る気持ちであったろう。これで世界を理解し始める礎ができた、と。わからなければ、対象を半分に分ける。さらに半分に

Open Dialogue as a Discourse for Science : A Batesonian view

Naoki Nomura

\*名古屋市立大学人間文化研究科：School of Humanities and Social Sciences, Nagoya City University

〒467-8501 愛知県名古屋瑞穂区瑞穂町字山の畑1

する。分解する。そうすれば測定が可能になる。その測定可能になったものを集めれば、全体がわかる。この思考モードが、どれだけ現在の私たちの世界観となったかを考えたとき、デカルトの影響力を思い知る。

デカルトのこの思考モード——分ける、測る、寄せ合わす——は、操作的かつ機械的であり、観る者は自分つまり主観から切り離された対象と向き合う (Berman, 1981)。理解の要は、測定できるか否かにかかり、計れないものは存在しない。この思考はまた実験という「知の形式」と相性がいい。「自然を追い込み、答えを吐かせる」というベーコンの思想に通じ、われわれの環境、自然、宇宙までもが、生命をもたず終わりも意味もなくただ動いている物体群として捉えられた。テクノロジーをもってすれば、自然はその秘密を明かす。「自然を拷問台にかける」と言わんばかりのベーコンの思想下では、実験者の心も自然の流儀に任せてはならない——心も機械のように動くことが要求される。

この世界観が今日の利便性をもたらしたことは事実である。一方で自然破壊とそれに伴う生物種の減少、人類の生存までも危うくする原発被害、大量破壊兵器の拡大につながったことも否定できない。デカルトから350年後、二元論が矛盾の増大にもつながることを人々が気づき始めた頃、Gregory Bateson (1904-1980) によって新しい科学の輪郭が示された。デカルトの変換として、Bateson の特徴は、(1) 自然を生きたものとして捉える、(2) 心と身体を一体に捉える、(3) 観察者を内側の者として捉える、に集約されよう。Bateson 以外にも新パラダイムの形成に関わった者はいるが、モリス・バーマン (Berman, 1981) に従い、デカルト的パラダイムから Bateson 的パラダイムを対比するというシンプルな手順で説明したい。

(1) 生物はそれぞれに適した環境で自らの世界、ユクスキュルの言う「環世界」を形づくり生活圏とする (Uexkull & Kriszat, 1934)。ここでは、「生物+環境」が生存の単位となるから、環境を破壊する生物は自らを破壊すること

になる。人間も例外ではない。「生物+環境」なる生存ユニットは、フィードバックするコミュニケーション・システムであり、生物は環境に働きかけ、環境は生物に応答する。共に進化 (共進化) する過程という意味で、その環境は生きている (Bateson, 1972, pp454-471)。森の動物たちとその生態系は、両者がお互い生存を支えあう。

(2) 精神 (mind) は、身体とそれ以外のコミュニケーション回路全体に行き渡る。杖をもつ盲人のこころ配りは、自分の身体という皮膚内に終わらない——彼女の心は「身体+杖」のコミュニケーション回路全体に内在する。なぜなら、彼女は杖からの情報を元に歩尺を決め歩調をとるからである。ベンチに腰掛けて杖を脇に置けば、その皮膚内のみ心に通う。杖をとって歩き出したら、杖を含む歩行全体が精神性を「帯びる」 (Bateson, 1972, p465)。心は、コミュニケーションするまたは対話する全体に通い、サイバネティクスで言う回路全体にフィードバックが想定できるのと同義である。工学的現象を、実感できる概念へ架橋し翻訳したところに Bateson の面目躍如がある。「自己」の境界条件が変わる。

(3) 事象や出来事の意味は、観る者との関係で同定される (Bateson, 1972, 1979)。その関係はコンテキスト (文脈、状況、関係、タイミングなど) と言われる。例えば、「統合失調症」は医療者という第三者の体系 (コンテキスト) からの命名なので、当事者は異なる捉え方をするだろう (参照、浦河べてるの家, 2005)。出来事はコンテキストとともに理解可能となるが、どんな科学的言明もそれ自体が真であることはない——誰が観た真かである。量子論で観察者次第で現象が異なって現れるのはその例である。「参加する科学」 (Berman, 1981) の枠組みでは、主体は内側にいるから、「光とは何か」ではなく「あなたにとって光は何か」となり、観察者と被観察物という二項対立がゆるむ。観察者を外から内にもってきて展開する科学を、文科系では「ナラティブ・ターン」 (Anderson et al, 2013)、理科系では「内部観測」 (松野, 2016)

の言葉で表す。

これらを礎石に据えたとき、科学はその様相を変える。例えば、「物質」「データ」「現象」などの言葉は、観察者を第三者として切り離れた二分法である。具体的な語り手が見えない。対話するというオープンダイアログの世界観からも不自然である。新たなパラダイムは古いパラダイムを包含しても排除するのであってはならないが、意識的かつ目的にのみ則した行為は、これは合理性とは言え、直線的であり、循環する全体を見渡すことができない。では、新たなパラダイムは具体的にはどのようなものか、ファミリーセラピー（家族療法）の領域で説明してみる。

ファミリーセラピーは Bateson から多大な影響を受けた。そのダブルバインド理論は、コミュニケーション言語（関係性言語）でもって、それまで個体言語でしか表現できなかった病理現象を、関係という言語によって記述、解釈できることを証明した。関係性言語で病理が記述できるのなら、その言語でもって治療もできるのではないか。そこから新しい治療法、すなわちファミリーセラピーの手法の数々が躍り出た。

ふつう私たちは個人と個人がまずあって、その上で関係が結ばれると考える。これは、「我思う、ゆえに我あり」の思考モードの延長でしかない。「我」の存在は絶対である。しかし、コンテキストとフィードバックに基づく思考モードでは——たとえ実感するのが難しいとはいえ——関係が主役であって、個は脇役である（物理学にも、重力や時間／空間の一体化のように実感が難しいものは多い）。生き続け、進化していくのは、この関係性の方である。進化する主体も「生物＋環境」というユニットであり関係項である。

この視点を愚直に受け取りファミリーセラピーは進化した。生きる主体は関係項、つまり現在進行するコミュニケーションの連鎖であること、そこでは精神と身体を分離する必要のないこと、それに関わる人は「三人称で語る観察者」ではなく「一人称の参加者」であること。

ここに心が回路全体を、つまり会話する全体を一つのシステムとして捉える認識論ができあがる。これがナラティブセラピーである。ファミリーセラピーにこれできたのは、どの領域よりもこの認識論を深く理解したからであろう。そこでは、個人ではなく、会話、対話という関係が主役になり、専門家としての治療者が仕切る個人療法との決別がある。

これを鮮やかにやってみせたのが、老練なファミリーセラピスト、Harold Goolishian だった。1988年の彼らの論文「言語システムとしてのヒューマン・システム」(Anderson et al, 2013)に至って、Batesonに埋め込まれているながら後継者が十分掘り起こさなかった部分、つまり内側にいる観察者の存在が言語化できる道筋が描かれた。言葉や会話の中にいるという視点でもって、三人称ではなく一人称の記述になるとしたのがナラティブであり、当事者研究とも通じるものがある。

Goolishianのこの会話への姿勢を象徴するのが「無知の姿勢」(Not-knowing)というスタンスである (Anderson et al, 1992)。「無知の姿勢」は、医療の専門家が患者に対し「私は病気の体験については無知なので、どうか教えてください」と言って、患者やクライアントを「経験専門家」と捉える状況をいう。その場合、続けられる会話そのものが治療的となる。医療者が理解途上に留まること、すなわち患者を理解し続けようというのが、患者にとって治療的と考える。何かを助言したり処方したりという「原因」が快方という「結果」につながる、という因果論は採用されない。

Goolishianの言葉を借りるなら、「私たちの視点は、ひとつの観察、ひとつの問題、ひとつの理解、ひとつのセラピー、そのどれを取ってみても、私たちが参加するコミュニケーションの現場には特有でユニークなものがあるというところにある」(Anderson et al, 2013, p78)。近代科学が目指した客観性と一般化（同じ統合失調症ならAさんもBさんも基本は同じ）というパラダイムは崩れ去っている。このような思想的文脈においての「無知の姿勢」がいかに

強力なものであるか想像できるだろう。統合失調症の治し方とは？ これは問いの立て方が間違っている。

同様の動きは医療人類学でも、医師で人類学者、Kleinman Aによる『病いの語り』(1988)に見られる。専門家が病気を外側から名付ける「疾患」(disease)を、当事者が内側から語る経験「病い」(illness)から分けたのは、二分法でありながらわかりやすく、ナラティブの位置を明確にした。「疾患」と「病い」が対等に向き合うとき、医療の歯車は回り始める。以来、『ナラティブ・ベイスト・メディスン』(Greenhalgh & Hurwitz, 1998)や『ナラティブ・メディスン』(Charon, 2006)などの展開につながった。このように内側からみた世界がどのようなものかの探求は、フィールドワークをとおして人類学者が追い求めてきたものでもあった。

一方、ナラティブが理論的に大きな影響を受けたのが、ロシアの文芸理論家、ミハエル・バフチン(1895-1975)である。バフチンは、ドストエフスキーの小説世界を「ポリフォニー」(多声楽)という概念でまとめ、対話の意義、生きた言葉(会話における言葉)がもつ不確定性、創造性について探求した(Bakhtin, 1995, 1996)。中でも注目は、言葉に染み込んだ他者の声が響く様を見事に理論化したことだ。文芸の理論であるバフチンの『小説の言葉』(1996)や『ドストエフスキーの詩学』(1995)が、Bateson由来の認識論と出会い、合致した意義は大きい。両者が架橋されたとき、ナラティブおよびオープンダイアログの基本理論はほぼ描かれたと言っていい。

Goolishianの言葉と呼応するように、バフチン(1996)はこう表現する。「生きた言葉がその対象へ関係するしかたは、ひとつとして同じではない。言葉と対象、言葉とそれを語る人格との間には、同一の対象、同一のテーマに関する異なる、他者の言葉の、弾力的で、しばしば見通すことの困難な、媒体がひそかに介在している」(p39)。私たちは、覚えた言葉を機械の

ように発話するのではない。言葉は、対話の中で、その生きた応答として生まれる。言葉の意味は、「他者の言葉」と対話的に作用し合うなかで決められ変化していく。

ここでいう「他者の言葉」は、目前の相手の言葉に限らない——古の言葉、故人の言葉、周り人の言葉、使うどの言葉にも「足跡」が残っている。「いつとなく大宮人の恋しきに 桜かざししけふもきにけり」(源氏物語)と須磨に流された光源氏が詠んだのは、「ももしきの大宮人はいとまあれや 桜かざして今日も暮らしつ」(和漢朗詠集)という山辺赤人の詠みを踏まえている。言葉には先人の心が木霊しているが、それは古典文学に限らない、私たちの日常には他者の声が多声的に響いている。バフチンは、「われわれの言語活動は、他者の言葉に遍く満たされている」(p52)と表現し、Goolishianは、「私たちは会話の中に生きている」(p58)と述べた。

フィンランドにおけるオープンダイアログの立役者のひとり、精神科医、カリ・ヴァルタネンの冒頭言葉に戻ってみよう。オープンダイアログの祖先は、Batesonとバフチンのふたりに遡るといえる。その上で、これをBatesonとバフチンの視点から眺めてみよう。オープンダイアログは、確かにひとつの治療形態に結びついたが、「ことはそれだけではない」とも言えそうだ。openという言葉にも、dialogueという言葉にも、精神療法だけに、という限定的意味合いは感じられない。狭義では、臨床の一形態としてのオープンダイアログということだろうが、広義では、デカルト的パラダイムと異なる「知の探り方」(a way of thinking)、「科学の語り方」(scientific discourse)として捉えてよいのではないだろうか。「科学」は語られることで顕われるのだから。

個人の体験としてここまで「物語としての歴史」(White, 1981)を綴ってみたが、オープンダイアログの導入にあたり、一点おさえておきたい。対等で水平な対話環境が持ちやすい西洋と違い、日本では権威の偏りから会話自体の



偏りがあらわになることが多い。医師や専門家に付与される権威は大きい。二者関係である限り権威はなかなか薄まらないので、数名以上での対話が適当かもしれない（斎藤，2015）。日本での「寄り合い」の伝統をみても、「寄り合い」の議長（畔頭，百姓代，区長など）が、村内の推薦または持ち回りで決まるのであれば、小地主と小作人の階級差はあれ、やりとり自体は対等に近かった（宮本，1984）。そこで、以下のガイドラインも水平性が前提であることを強調しておきたい。

北欧からのオープンダイアログにみる原則（Seikkula & Arnkil, 2006）には、①開かれた質問をすること、②クライアントの発言に応答すること、③今この瞬間を重視すること、④多様な観点を明るみにすること、⑤症状より相手自身の言葉と語りを重視すること、⑥ミーティング中にスタッフ同士が言葉を交わすこと、⑦透明であること（スタッフのみで患者の話をしていない）、⑧不確かさに耐えること、などが含まれる。これらは総括的な指示だが、上の理論的系譜をその出自としている。

「開かれた質問」は、専門家が自分の仮説を確かめる質問とは異なり、相手の「環世界」を、非言語を含め理解しようとする「無知の姿勢」が基本となる。多様な考えを多声的に呼び込み、システムの部分に与えられる自由（言語的可動性）を確保する。「クライアントへの応答」や「この瞬間の重視」は、会話そのものが生きていて、今の発話が次の発話を想定して、現在進行していく様は、会話も、ダンスも、他の相互作用も同じであることを意味する。“Here and now”（いまここ）を踏み外して会話もダンスもない。会話は一種の「ダンス」とみなしていただろう（Hall, 1983）。

「多様な観点」とは、医学の言葉の絶対視ではなく、それを一つのストーリーとして他の諸々と同価値に見ていくことの言い換えである。「多様な観点」で間違いやすいのは、「誰それはこう述べている」と会話の外から知識を持ち込むときである。多様であっても、権威的な言葉として持ち込まない配慮が必要だ。会話内に留

まるとそこから自然に出て行けるからだ。「相手の言葉の重視」とは、言葉にはさまざまな足跡があり、発話自体がポリフォニックだという認識とともに、外側からの言葉で輪郭（理解）を描かないことである。相手の言葉を矛盾も含め理解することにある。間違いやすいのは、相手の言葉の暗の意味（メタ・メッセージ）を読もうとすることだ。それでは結局自分の意味になってしまうから。

「ミーティング中のスタッフ同士の言葉がけ」は、対話の参加者にメッセージは遍く届き、二者関係に限定されないことの忠実な実行であり、リフレクティング（Andersen, 1991）の名で知られている。患者が独り語りに終始したら、オープンダイアログではなく、「独演会」になってしまう。ここで言う「透明性」とは、本人が参加してはじめて、意義あるメッセージになるという意識に他ならない。参加の文脈から離れて、「××とは何か？」は、その人の生きる現実と関係ない。

「不確かさへの寛容」とは、参加する部分にとって、全体のすべてを知り尽くすことはできない、という哲学的スタンスのことである。知の不完全性こそ、知の源であり、知が完全だと認識されたらそこで対話は終わる。言葉も仕草も発せられるたびに、一つひとつが次のメッセージのコンテキスト（文脈）になり、意味を明らかにしていく。状況の曖昧さについていくとする伴走は、コントロールする、取り仕切る、というのと異なる。

以上を俯瞰したとき、オープンダイアログが Bateson のサイバネティックなコミュニケーション理論とバフチンの文芸を元にした対話理論にしっかり着地していることが認められるだろう。その形成に理論と実践で貢献したすべてをここで述べたわけではないが、オープンダイアログは実に盤石な理論の上に立っていると考えていい。デカルト的パラダイムから離れていく具体策の一つとしてオープンダイアログが位置づけられたらよいだろう。その射程は、臨床実践ばかりか、学術会議のあり方、授業の

進め方, ビジネス・ミーティングのもち方, 裁判員裁判, 国会審議など, いずれが対象になってもおかしくないと思う。私たちは「会話する」という特徴を備えた生物である。「科学の語り方」や「知の形式」が進化の時をむかえたのかもしれない。

### 文 献

- Andersen T (1991) *The Reflecting Team : Dialogues and dialogues about the dialogues*. New York, Norton. (鈴木浩二訳 (2001) *リフレクティング・プロセス—会話における会話と会話* (新装版 2015). 金剛出版)
- Anderson H & Goolishian H (1992) *The client is the expert : A not-knowing approach to therapy*. In S McNamee & K Gergen (Eds.), *Therapy as Social Construction*. London, Sage Publications. (野口裕二・野村直樹訳 (1997) *ナラティブ・セラピー—社会構成主義の実践*. 金剛出版)
- Anderson H, Goolishian H & Nomura N (野村直樹訳 (2013) *協働するナラティブ*. 遠見書房)
- Bakhtin M (望月哲男・鈴木淳一訳 (1995) *ドストエフスキーの詩学*. ちくま書房)
- Bakhtin M (伊東一郎訳 (1996) *小説の言葉*. 平凡社)
- Bateson G (1972) *Steps to an Ecology of Mind*. Chicago, Chicago Univ Press. (佐藤良明訳 (2000) *精神の生態学*. 新思索社)
- Bateson G (1979) *Mind and Nature : A necessary unity*. New York, EP Dutton. (佐藤良明訳 (2006) *精神と自然*. 新思索社)
- Berman M (1981) *The Reenchantment of the World*. New York, Cornell Univ Press. (柴田元幸訳 (1989) *デカルトからバイトソンへ—世界の再魔術化*. 国文社)
- Charon R (2006) *Narrative Medicine : Honoring the stories of illness*. Oxford Univ Press. (斎藤清二, 他訳 (2011) *ナラティブ・メディスン*. 医学書院)
- デカルト R (1637) (三宅徳嘉・小池健男訳 (2005) *方法叙説*. 白水社)
- Eliade M (1949) *Myth of the Eternal Returns*. Paris, Librairie Gallimard, NRF. (堀一郎訳 (1963) *永遠回帰の神話*. 未来社.)
- Greenhalgh T & Hurwitz B (1998) *Narrative Based Medicine*. London, BMJ Books. (斎藤清二, 他訳 (2001) *ナラティブ・ベイスト・メディスン*. 金剛出版)
- Hall ET (1983) *The Dance of Life : The other dimension of time*. New York, Anchor Press. (宇波彰訳 (1983) *文化としての時間*. TBSブリタニカ)
- Kleinman A (1988) *The Illness Narratives*. New York, Basic Books. (江口重幸, 他訳 (1996) *病いの語り*. 誠信書房)
- 松野孝一郎 (2016) *来たるべき内部観測—一人称の時間から生命の歴史へ*. 講談社.
- 宮本常一 (1984) *忘れられた日本人*. 岩波文庫.
- 斎藤環 (2015) *オープンダイアログとは何か*. 医学書院.
- Seikkula J & Arnkil T (2006) *Dialogical Meetings in Social Networks*. London, Karnac Books. (高木俊介・岡田愛訳 (2016) *オープンダイアログ*. 日本評論社.)
- Üexkull von J & Kriszat G (1934) *A Stroll Through the Worlds of Animals and Men*. New York, International Universities Press. (日高敏隆・羽田節子訳 (2005) *生物から見た世界*. 岩波文庫)
- 浦河べてるの家 (2005) *べてるの家の当事者研究*. 医学書院.
- White H (1981) *The value of narrativity in the representation of reality*. In WJT Mitchell (Ed.), *On narrative*. Chicago, University of Chicago Press. (海老根宏・原田大介訳 (2001) *物語と歴史*. リキエスタの会)